

Catch the WAVES!

新潟県立佐渡中等教育学校
学校だより 令和8年度4月号
HP: <https://sado-ss.nein.ed.jp/>

令和8年度がスタート!!

令和8年4月7日(火)、始業式が行われ、佐渡中等教育学校の令和8年度が始まりました。学年が1つ上がり、校長先生の講話を聞く生徒の皆さんのようすは、昨年度に比べて大人びたものになっているように感じられました。職員が入れ替わり変化した環境の中で、幾ばくかの淋しさとこれからの期待に溢れる厳かな雰囲気の中で行われた始業式は、よい1年が始まることを示すかのような、とても良い天気での実施となりました。

翌8日(水)には、佐渡高校両津キャンパスの第1回入学式が行われました。同じ学び舎でこれから共に生活する仲間を迎え、佐渡中等教育学校、佐渡高校両津キャンパスとしての1年が始まります。



〔始業式・新任式の様子〕

新しく佐渡中等教育学校に着任した先生方の紹介が、吉田校長先生から行われました。新しい年度の始まりに、生徒の表情もやや引き締まっているようすが窺えました。

ステージ上部の垂れ幕には、佐渡中等に加えて佐渡高校両津キャンパスの校章が新たに加わっています。



〔学校前の看板〕

新たに佐渡高校両津キャンパスの表示が追加されました。坂下の案内板も新しくなっているので、機会があれば確認してみてください。

始業式 校長講話

生徒の皆さん、おはようございます。改めまして、この春、佐渡中等教育学校に着任しました校長の吉田です。皆さんに会えるのを楽しみにしていました。どうぞよろしくお願ひします。

さて、いよいよ令和8年度、新学期が始まりますね。期待と不安が入り交じっていることと思います。今日、学校に来るのが楽しみだった、新学期が始まるのを心待ちにしていた、という人はどのくらいいるのでしょうか。いいですね。ぜひ、その明るく前向きな気持ちを大切にしてください。皆さんの存在が、周りに元気を与えてくれます。

一方で、とうとうこの日が来てしまった、新学期のことを考えるだけで昨日から不安でいっぱいだった、という人もいます。大丈夫。とても自然なことです。私自身もそうですが、大人になっても、新しい環境を前にすると、期待より不安の方が大きいという人はたくさんいます。不安なのは自分だけではない、まずはそう思って、友達と他愛のない話をしたり、愚痴をこぼしたりしながら、新しい生活に少しずつ慣れていってください。

ただ、一つ大切なことがあります。もし春休みの間に、生活のリズムを大きく崩してしまった人がいたら、そこは早めに立て直しましょう。まず必要なのは、生活の土台を固めることです。登校時間に間に合うように起きること、朝食を食べること、夜はきちんと眠ること。こうした当たり前のことが、体だけでなく、心を支える大切な土台です。土台が崩れると、心もグラグラします。すると、普段ならできることができなくなったり、物事を前向きに考えられなくなったりします。だからこそ、まずは毎日の生活を整えることを大事にしてください。

よく、現代はVUCA（ヴーカ）の時代と言われます。社会がめまぐるしく変化し多様化が加速する時代です。そのような時代を生きるため、例えば、学校では探究活動を大切にしているところですが、しかし、どんな時代になっても変わらないものがあります。それは、私たちは、日々の「生活」を積み重ねて生きている、ということです。だからこそ、自分の生活を整えること、自分にとって心地よい毎日をつくることを大切にしてほしいと思います。

さて、新学期の始まりにあたって、もう一つ話したいことがあります。私は、「学校は楽しくなくてはならない。楽しくなければ学校ではない」と考えています。もちろん、ここで言う「楽しい」とは、ただ面白おかしいという意味ではなく、授業が分かること、行事に打ち込めること、部活動に励めること、そして人とのつながりの中で安心できること。それぞれが充実してはじめて、学校は楽しい場所になるのだと思います。

その中でも、人間関係はとても大きなものです。人との関わりは、うまくいけば大きな喜びになります。でも、うまくいかないと、それだけで世界が終わったような気持ちになることもあります。実は私自身、昔からかなりの人見知りです。そして、人からどう見られているか、自分の言葉がどう受け止められているか、かなり気にしてしまう性格です。この歳になっても、そうした性格を克服できずにいます。

そんな私が、時々思い返しては、安心感と勇気をもたらしている言葉があります。作家、村上春樹さんの言葉です。村上さんは、若い頃、ジャズバーを経営していたそうです。その時の経験について、こんなことを書いていますので、引用します。

『みんなにいい顔はできない』、平たく言えばそういうことになる。店を営んでいるときも、だいたい同じような方針でやっていた。店にはたくさんの客がやってくる。その十人に一人が『なかなか良い店だな。気に入った。また来よう』と思ってくれればそれでいい。十人のうちの一人がリピーターになってくれれば、経営は成り立っていく。逆に言えば、十人のうちの九人に気に入ってもらえなくても、べつにかまわないわけだ。そう考えると気が楽になる。』

私は、この姿勢にとっても惹かれます。みんなに好かれようとしなくていい。全員に認められる必要はない。それだけで、ずいぶん心が軽くなる人もいるのではないのでしょうか。実際、そのお店はかなり繁盛していたそうですから、優れた経営論とも言えます。

ただし、この「十人のうちの一人がリピーターになってくれれば」には続きがあります。村上さんは、続けてこうも述べています。

しかしその『一人』には確実に、とことん気に入ってもらい必要がある。そしてそのために経営者は、明確な姿勢と哲学のようなものを旗じるしとして掲げ、それを辛抱強く、風雨に耐えて維持していかななくてはならない。それが店の経営から身をもって学んだことだった。

※村上春樹(2007).『走ることについて語るときに僕の語ること』.文藝春秋

私は、この文章を読むたびに、安心する一方、身が引き締まる思いがします。みんなに好かれる必要はない。でも、自分を分かってくれる人の信頼は決して裏切ってはならない、そしてそのためには、自分が何を大切にしているのか見失わないよう努めなければならない。

今はまだ、皆さんの頭に、その「十人に一人」の顔が思い浮かばないかもしれません。でも、見えていないだけで、すでに近くにいるのかもしれない。あるいは近い将来、あなたの隣にそっと現れるはずです。あなたのありのままを気に入って、あなたの良さを分かってくれる人が、きっといます。ですから、周りに合わせ過ぎて自分の思いを消したりせず、自分が大切にしていることを守り続けてください。好きなことをもっと好きになる。自分の考えをもっと磨く。そうして、自分の良さや個性を少しずつ育てていってほしいと思います。

さて、6年生はいよいよ、それぞれが考える進路に向けて行動する年ですね。ともすると、目の前のことに追われて、自分が何をしたいのか、何を大切にしてきたのか見えにくくなる場合があります。そんなときこそ、一度立ち止まって、何を求めて自分はその進路を選ぼうとしているのか、自分は何のために学ぶのかを考えてください。

この一年、皆さん一人ひとりが、自分を大切にしながら、それぞれの歩みを進めていくことを期待しています。明日の午後には、佐渡高校両津キャンパスに入学する仲間もやって来ます。学校は違っても同じ校舎で学ぶ仲間です。どうか、困ったときには手を差し伸べてあげてください。皆で支え合いながら、佐渡中等教育学校、佐渡高等学校両津キャンパスを、素晴らしい学校にしていきたいと思います。

以上で前期始業式の話が終わります。